

## 5 スポーツ観戦

### 5-1 直接スポーツ観戦状況

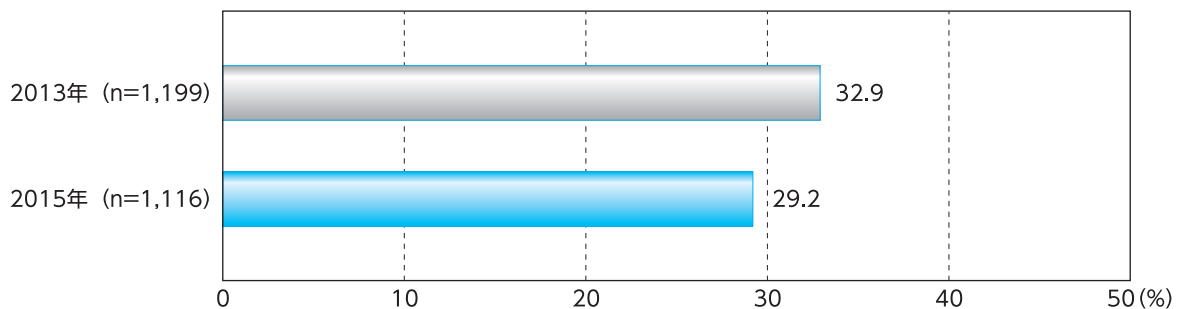
過去1年間に体育館・スタジアム等へ足を運んで直接スポーツの観戦をした者は全体の29.2%であり、わが国の4~9歳の子どもの直接スポーツ観戦人口は190万人と推計できる(図5-1)。2013年調査の32.9%と比較すると3.7ポイントの減少となった。ただし、2013年調査では子どもの保護者に対して直接スポーツ観戦の有無をたずねたが、今回の調査では直接子どもにたずねる方法へ変更したため留意が必要である。

性別にみると、男子の観戦率は31.1%、女子は27.3%であり、男子が女子を3.8ポイント上回った(図5-2)。

就学状況別にみると、未就学児25.0%、小学1・2年27.7%、小学3・4年33.2%と学年が上がるにつれて観戦率が高くなる。

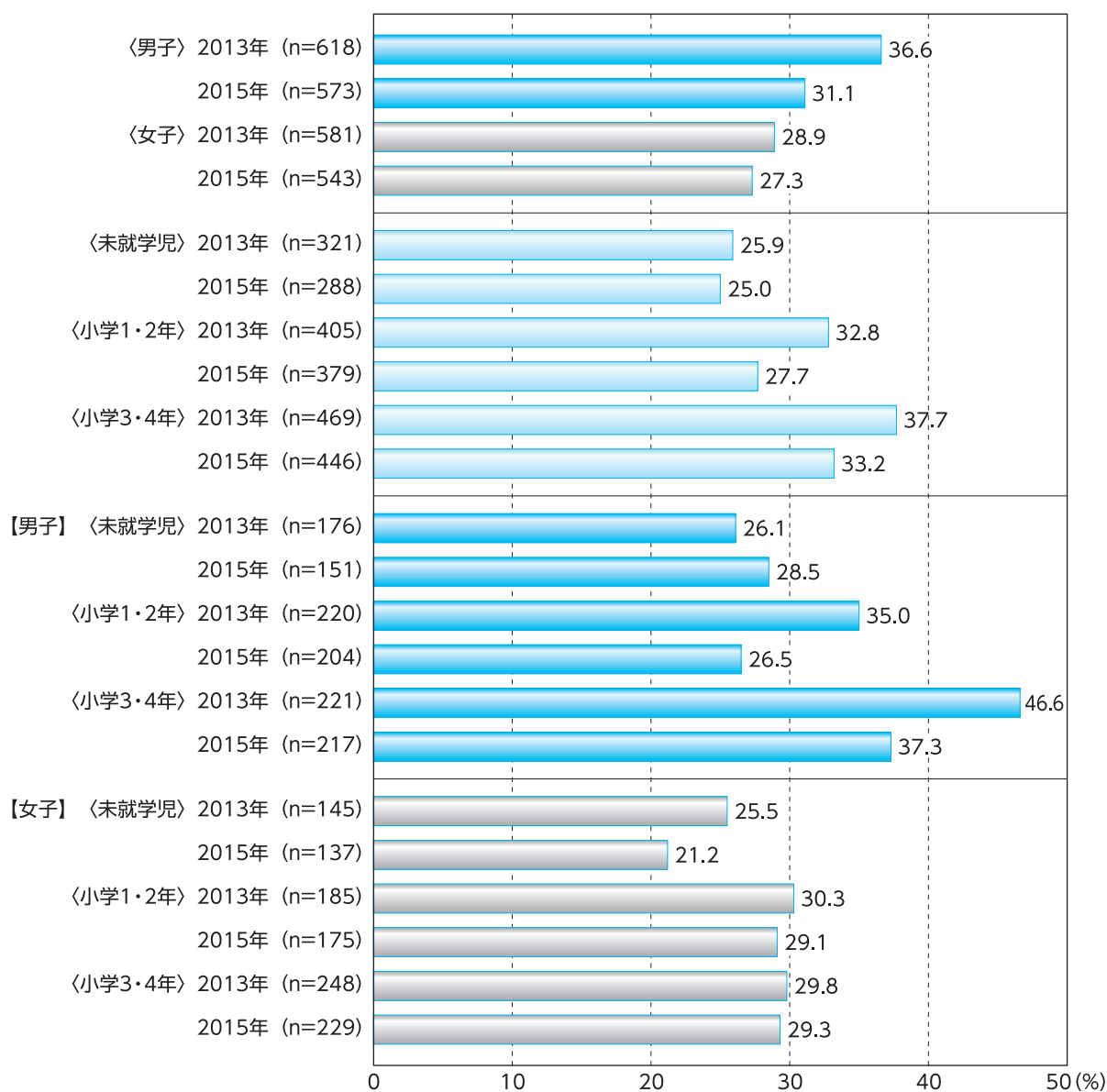
性別・就学状況別にみると、男子では未就学児28.5%、小学1・2年26.5%であるが、小学3・4年になると37.3%と10ポイント近く観戦率が高くなる。一方、女子では未就学児21.2%、小学1・2年29.1%、小学3・4年29.3%と、未就学児の観戦率が最も低く、小学生ではあまり差はみられない。男女の差は、小学3・4年で最も大きく、男子が女子を8ポイント上回る。

運動・スポーツ実施頻度群別にみると、非実施群17.1%、低頻度群22.9%、中頻度群30.1%、高頻度群31.6%と、実施頻度が高くなるにつれて直接スポーツ観戦率も高くなる(図5-3)。



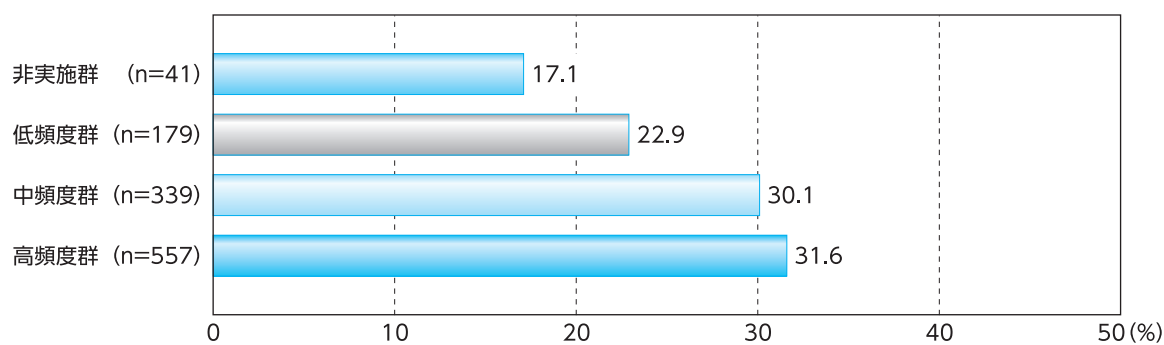
【図5-1】直接スポーツ観戦率の年次推移

資料：笹川スポーツ財団「4~9歳のスポーツライフに関する調査」2015



【図5-2】 直接スポーツ観戦率の年次推移(性別・就学状況別・性別×就学状況別)

資料: 笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2015



【図5-3】 直接スポーツ観戦率(頻度群別)

資料: 笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2015

## 5-2 直接観戦したスポーツ

直接観戦したスポーツは、全体では「プロ野球(NPB)」が11.7%と最も高く、次いで「Jリーグ(J1、J2、J3)」6.5%、「アマチュア野球(大学、社会人など)」2.2%、「マラソン・駅伝」2.1%、「高校野球」2.0%であった(表5-1)。

性別にみると、男女ともに「プロ野球(NPB)」(男子15.0%、女子8.3%)が最も観戦率が高い。次いで、男子では「Jリーグ(J1、J2、J3)」7.0%、「高校野球」3.1%であり、女子では「Jリーグ(J1、J2、J3)」5.9%、「マラソン・駅伝」3.3%であった。

就学状況別にみると、いずれの学年も「プロ野球(NPB)」(未就学児8.3%、小学1・2年11.3%、小学3・4年14.3%)の観戦率が最も高く、学年が上がるにつれてその割合は高くなる。次いで、いずれの学年も「Jリーグ(J1、J2、J3)」(未就学児4.5%、小学1・2年7.7%、小学3・4年6.7%)であった。いずれの学年も同様の種目が上位を占めるが、小学3・4年では「プロ野球(NPB)」は「Jリーグ(J1、J2、J3)」を7.6ポイント上回っており、倍以上の観戦率の差がみられた。

【表5-1】直接観戦したスポーツ(全体・性別・就学状況別・複数回答)

(%)

順位	種目	全体 (n=1,116)	男子 (n=573)	女子 (n=543)	未就学児 (n=288)	小学1・2年 (n=379)	小学3・4年 (n=446)
1	プロ野球(NPB)	11.7	15.0	8.3	8.3	11.3	14.3
2	Jリーグ(J1、J2、J3)	6.5	7.0	5.9	4.5	7.7	6.7
3	アマチュア野球(大学、社会人など)	2.2	2.3	2.2	1.4	2.9	2.2
4	マラソン・駅伝	2.1	0.9	3.3	1.7	1.1	3.1
5	高校野球	2.0	3.1	0.7	2.1	1.3	2.5
6	サッカー(高校、大学、JFLなど)	1.9	1.9	1.8	3.1	1.3	1.6
7	バスケットボール(高校、大学、NBLなど)	1.3	1.6	1.1	1.4	1.8	0.9
	プロバスケットボール(bjリーグ)	1.3	1.4	1.1	0.7	1.1	1.8
9	バレーボール(高校、大学、Vリーグなど)	0.7	0.5	0.9	0.3	0.5	1.1
10	剣道	0.5	0.5	0.6	0.7	0.8	0.2
11	空手	0.4	0.2	0.6	0.3	0.5	0.2
	サッカー日本代表試合(五輪代表を含む)	0.4	0.7	0.0	0.3	0.0	0.7
	ハンドボール	0.4	0.3	0.4	0.0	0.0	0.9
	ラグビー	0.4	0.3	0.4	0.7	0.3	0.2
15	ダンス	0.3	0.0	0.6	0.3	0.0	0.4
	バドミントン	0.3	0.2	0.4	1.0	0.0	0.0
	プロレス	0.3	0.3	0.2	0.0	0.0	0.7
	メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)	0.3	0.5	0.0	0.7	0.0	0.2
	陸上競技	0.3	0.3	0.2	0.0	0.3	0.4
	直接観戦したことはない	70.8	68.9	72.7	75.0	72.3	66.8

資料：笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2015

### 5-3 テレビによるスポーツ観戦状況

テレビによる観戦状況として「あなたは、普段テレビでスポーツの試合をみていますか」とたずね、「よくみている」「時々みている」「ほとんどみていない」「まったくみていない」の4段階で回答を求めた。

「時々みている」36.0%が最も多く、次いで「ほとんどみていない」29.2%、「まったくみていない」24.8%、「よくみている」10.0%であった(図5-4)。「よくみている」と「時々みている」の割合を合計すると46.0%であり、わが国の4~9歳の子どものテレビスポーツ観戦人口は299万人と推計できる。

2013年調査と比較すると「よくみている」と「時々みている」を合計した割合は、39.4%から46.0%へと6.6ポイント増加していた。ただし、直接スポーツ観戦と同様、2013年調査では子どもの保護者に対してテレビでのスポーツ観戦の有無をたずねたが、今回の調査では直接子どもにたずねる方法へ変更したため留意が必要である。

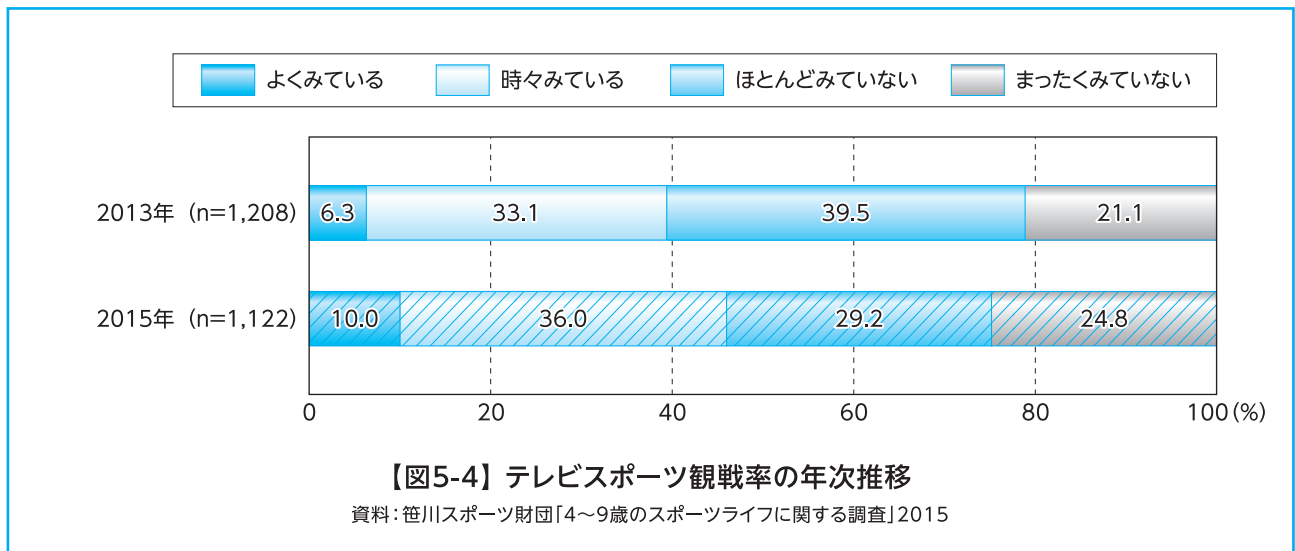
性別にみると、男女ともに「時々みている」(男子37.5%、女子34.5%)が最も多く、次いで「ほとんどみていない」(男子26.5%、女子32.1%)であった(図5-5)。「よくみている」と「時々みている」を合計した割合は、男子50.9%、

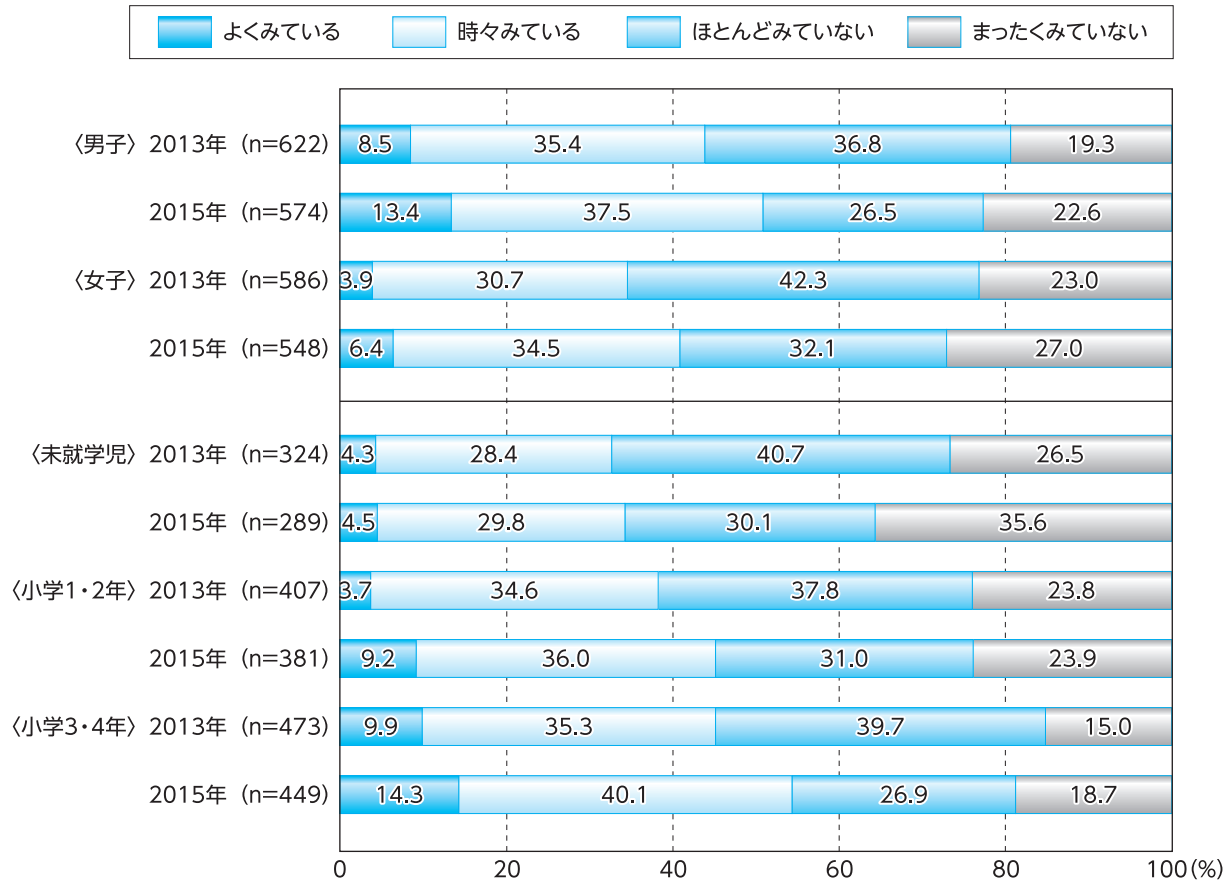
女子40.9%であり、男子が女子を10ポイント上回る。直接スポーツ観戦と同様、テレビでのスポーツ観戦においても女子に比べて男子のほうが観戦率は高かった。

就学状況別にみると「よくみている」と「時々みている」を合計した割合は未就学児34.3%、小学1・2年45.2%、小学3・4年54.4%と学年進行にともなって観戦率は高くなる。

性別・就学状況別にみると、男女ともに学年が上がるにつれて「よくみている」と「時々みている」を合計した割合は高くなる(図5-6)。しかし「よくみている」の割合をみると、未就学児では男子4.6%、女子4.3%とほとんど男女の差はみられないが、小学1・2年では男子12.3%、女子5.6%と6.7ポイントの差となり、小学3・4年では男子20.6%、女子8.2%と12.4ポイントと小学生になると男女の差は拡大する。

運動・スポーツ実施頻度群別にみると「よくみている」と「時々みている」を合計した割合は非実施群17.1%、低頻度群36.2%、中頻度群47.5%、高頻度群50.4%であり、運動・スポーツの実施頻度が高い者ほど、テレビでのスポーツ観戦率も高かった(図5-7)。





【図5-5】 テレビスポーツ観戦率の年次推移(性別・就学状況別)

資料：笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2015

COMMENTS

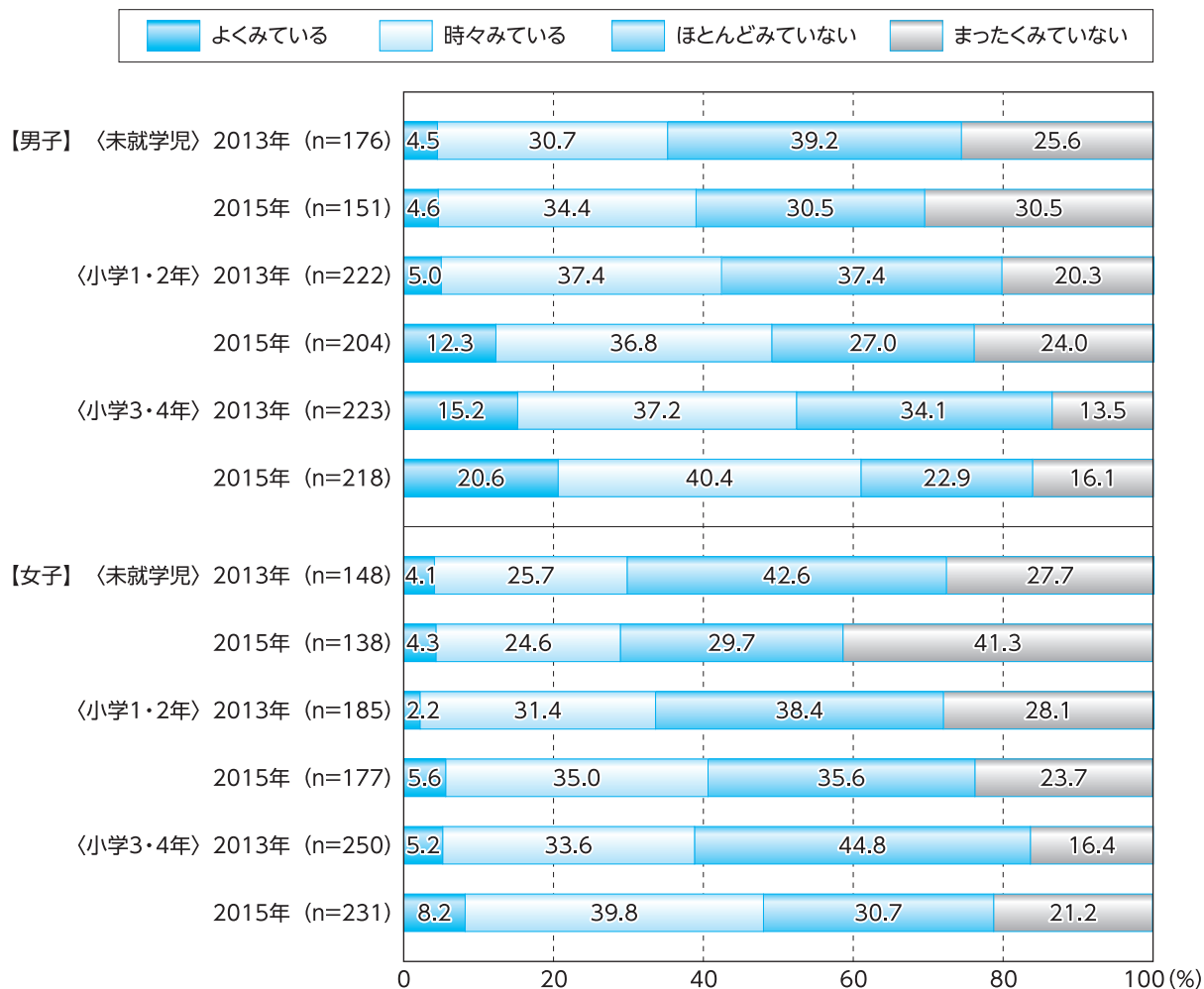
■いろいろなスポーツの試合結果を地域のケーブルテレビで放送したり、地方新聞に記事を載せたりしてほしい。本人たちのはげみになると思うし、また地域の人々にそのスポーツを広めていきたい。(8歳女子の母親)

■多種多様なスポーツがあるのに、日本はそれに触れたり、観たりする機会が少なすぎると思う。メジャーなスポーツだけでなく、マイナーなスポーツでも触れる機会があればいいと思う。(4歳女子の母親)

■プロ選手の交流会が身近にあるといいと思います。また、地域ごとにそのようなイベントを実施してほしいです。(6歳女子の母親)

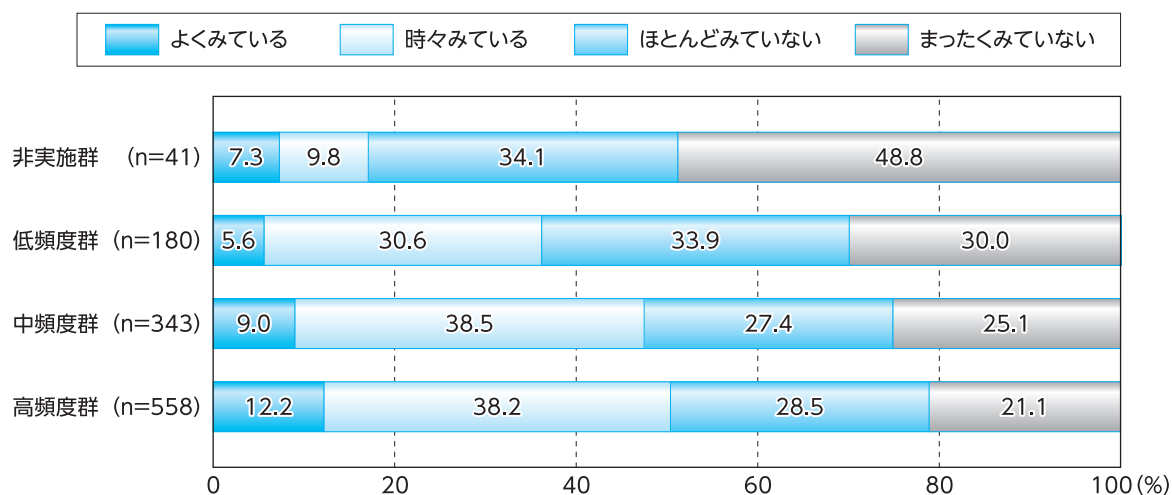
■現在住む地域には、近くに思いきってボールを投げたり蹴ったりできる場所がない。そうなると、どうしても子どもたちの運動・スポーツ活動が制限されてしまう。子どもたちの憧れとなる、カリスマのある選手がこれから多く出現することを願っています。(9歳女子の母親)

資料：笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2015



【図5-6】 テレビスポーツ観戦率の年次推移(性別×就学状況別)

資料：笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2015



【図5-7】 テレビスポーツ観戦率(頻度群別)

資料：笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2015